別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　半谷史郎

論文題目　ヴォルガ・ドイツ人の強制移住と自治区復活運動

本論文は 1941 年の独ソ戦開始直後にソ連で行われたドイツ人に対する強制移住と、その後の自治区復活運動について、ペレストロイカ以降のソ連・ロシアで公開された資料を綿密に分析することによって、詳細に論じたものである。スターリン時代、独ソ戦の前後に行われた強制移住の中で、ドイツ人は集団として最大規模のもので、最も重要であるにもかかわらずこれまで殆ど研究されてこなかった。本論はそうした歴史の空白を埋めようとした意欲的な論文である。

本論文の構成は次の通りである。はじめに、第一章：ドイツ人入植から強制移住まで、第二章：ヴォルガ・ドイツ人の強制移住、第三章：強制移住の地で、第四章、サラトフ州でのドイツ自治区復活反対運動、おわりに、で巻末に参考文献が挙げられている。注を除いた本文部分は 400 字詰めで 680 枚である。

まず、はじめにで論文の目的とこれまでの研究史を簡潔に述べている。論文の目的は、第一に、ドイツ人に焦点をあてて、これまで殆ど明らかにされてこなかった強制移住の実態をより具体的に解明すること、第二に、戦後のドイツ人の自治区復活運動を通じて、強制移住が当該民族になにをもたらしたのかを考察すること、の二点にあると明確に設定している。研究史の整理も適切な叙述となっている。第一章では、18 世紀のドイツ人入植から 1941 年までのドイツ人の歴史を概観し、以下の分析への橋渡しを行っている。

第二章では、ソ連におけるドイツ人の強制移住の全体像を示している。ここでは広い視野に立ってソ連における強制移住の中でのドイツ人強制移住の持っている意味、その特殊性をさぐるのと同時に、他の強制移住との共通性を明らかにする努力がなされている。ドイツ人の強制移住に関しては、その具体的プロセスを列車運行表などの公文書や回想をもとに再現している。ここは本論文の前半の中心部分であるが、資料に裏打ちされた生き生きとした叙述が圧巻である。特にこれまで知られていなかった列車運行表という貴重な資料を発掘し、そこからいかに多くの事実が読みとれるかを証明して見せた功績は大きい。

第三章では、ドイツ人の強制移住先のひとつであるカザフスタンでの状況が検討されている。まず、特別入植の確立する過程を論じ、その後、特別入植制度が解除されていく過程を分析している。そして自治区復活運動が始まった 1960 年代および西ドイツへの大量出国によってドイツ自治区構想が浮上した 1970 年代が検討されている。ここでは公文書、回想録と並んで、これまであまり利用されてこなかったソ連時代の国勢調査の結果がドイ

ツ人社会を分析する資料として用いられている。これによって教育水準および母語率の変遷に関して極めて説得的な叙述を展開している。また、本章第四節で扱われている 1979 年のツェリノグラード事件は、これまでまったく知られていなかった事件であり、極めて重要な新知見である。ツェリノグラード事件を発掘し、叙述したことは、本論文のもう一つの功績であろう。

第四章では 1989 年から高まりを見せたヴォルガ・ドイツ人自治共和国の復活運動とドイツ人の大量出国との関連性の分析が行われ、結局自治共和国回復運動の失敗がドイツ本国への大量出国へとつながったプロセスが明らかにされている。自治区復活構想はヴォルガ地方の住民の強い反対のために失敗したのだが、失敗の原因である地元住民の反対運動を地方の視座から具体的に詳述している。ここではサラトフ州の当時の新聞を丹念に検討し、地区レベルの動向、住民の意見を積み上げる形で全体像の再構成が試みられている。第四章は、全体としてペレストロイカ期の地方の政治を地方紙を使用して生き生きと再現して見せた点が評価できる。

本論文のテーマは、我が国はもちろん諸外国でも本格的に論じられることがほとんどなかったもので、それに取り組んだオリジナリティーは審査委員全員が高い評価を与えた。また、資料をもって語らせるという手堅い歴史叙述に関しても同様であった。資料に関しては、アルヒーフ資料こそ使っていないものの、公刊されたものはほぼ網羅的かつ体系的に収集し、なおかつ資料の海に溺れることなく、的確な分析を加え、重要資料を巧みに行論に生かしている。ロシア語の高い能力がその背景にあると考えられる。特に列車運行表や国勢調査の分析は画期的といっても過言ではなく、審査委員全員の高い評価を受けた。論文としてのまとまりも良く、論旨、文章ともに明快である。注の付け方など、論文の形式、体裁の点でもなんら問題は指摘されなかった。またドイツ人を扱いながらも、強制移住させられた他の民族との比較も十分に行っており、視野の広さが窺われる。もちろん審査委員から若干の不十分な点が指摘されたことも事実である。それは、領土的自治と文化的自治に関する理論的考察が欠けている、第四章について中央の対応とヴォルゴグラード州の動向をもう少し書き込むべきだった、ドイツ本国との関係についての叙述がやや不十分である、第一次世界大戦期など叙述にややうすい箇所がある、などである。しかし、これらはいずれも論文の欠陥の指摘というよりは、今後研究を深めていく際の課題として指摘されたもので、本論文の価値を低めるものではない。審査委員会の評価は、殆ど瑕瑾の見られない極めて優秀な論文という結論で全員が一致した。総じて本論文は、ソ連史研究、ソ連のドイツ人研究の分野で、卓越した貢献をしており、博士（学術）の学位を授与するのに十分な業績である、と認められる。